

関西学院大学 研究成果報告

2020年 6月 9日

関西学院大学 学長殿

所属：経済学部
職名：准教授
氏名：長谷川哲子

以下のとおり、報告いたします。

研究制度	<input checked="" type="checkbox"/> 特別研究期間 <input type="checkbox"/> 自由研究期間 <input type="checkbox"/> 大学共同研究 <input type="checkbox"/> 個人特別研究費 <input type="checkbox"/> 博士研究員 ※国際共同研究交通費補助については別様式にて作成してください。
研究課題	第二言語としての日本語ライティングにおける留学生ビリーフ
研究実施場所	関西学院大学
研究期間	2019年 4月 1日 ～ 2020年 3月 31日 (12ヶ月)

◆ 研究成果概要 (2,500字程度)

上記研究課題に即して実施したことを具体的に記述してください。

本研究課題を申請した背景として、筆者がこれまで行ってきた研究の位置づけをふりかえること、第二言語ライティング研究の動向を把握すること、L2ライティングのコーパス調査を行うこと、またこれまでの研究方法の妥当性を見直し、さらに今後の研究活動への大きな指針を得る、という種々の動機があった。

そこで、本研究では、以下の研究目的を設定することとした。

- ① ビリーフ研究の妥当性、位置づけの見直し
- ② 学習者要因研究の動向の把握
- ③ L2ライティングのコーパス調査の実施
- ④ L2ライティング研究における今後の課題の設定

以下では、上記①～④に分けて、研究実施内容とその結果を報告する。

① ビリーフ研究の妥当性、位置づけの見直し

筆者は、これまで日本語学習者のライティングに関するビリーフ研究について研究を行ってきた。日本国内の大学で学ぶ留学生を対象としたビリーフに関するパイロット調査では、調査票を用い、因子分析を用いて調査結果の検討を行った。その結果、筆者の行った分析上では一定の因子構造を得たものの、成果発表に対しては、分析の手法、分析結果の解釈など、調査分析において重要な点に関する見直しを要するコメントを受けた。そのため、このパイ

ロット調査に対する本調査計画を中断した。ビリーフ研究の妥当性および位置づけを見直すこととし、日本語教育分野のビリーフに関する先行研究を再検討し、ビリーフ研究が進んでいる英語教育分野におけるビリーフ研究の文献調査を行った。

その結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 因子分析はビリーフ調査分析における古典的かつ有用な手法ではあるが、結果の解釈や横断的見地に対する評価が分かれる。現在の動向においては、学習者の置かれている社会的な文脈に対する視点をビリーフ研究対象に含める必要がある。
- 2) ビリーフのみを取り出して調査分析を行うだけでなく、その結果と他の学習者要因との関連、また実際の指導場面にどのような還元ができるのかを見通した研究が少ない。
- 3) ビリーフとプロダクト／ストラテジー／指導法／教室活動等、他の項目との関連を見ることにより、日本語教育分野においても学習者ビリーフ研究を行う意義や妥当性が高まる。

② 学習者要因研究の動向の把握

上記①の3)で指摘したように、ビリーフ研究は学習者要因や学習者間の個人差研究の中の一分野として位置づけられるものである。ビリーフ研究の関連分野としては、学習者の情意的側面、学習に対する動機付け、学習者ストラテジーなどがある。英語教育分野のビリーフ研究では、効率的な学習に役立つとされるストラテジーを学習者に指導した結果、学習者の能力向上に対する効果は見られず、学習ストラテジーそのものを指導し習得させることは困難であるという研究結果がある。この知見に沿うならば、学習者の用いるストラテジーが明らかになっても、日常の教育現場において習得に有用なものとして学習ストラテジーを使用するように学習者へ指導することの効果に疑問が生じることになる。そのため、学習者の習得促進には、成功した学習者の用いたストラテジーを習得させるという表面的な指導ではなく、学習者自身による主体的な学びを促すようなサポートが必要となるという見通しを得た。

③ L2 ライティングのコーパス調査の実施

本研究課題の一環として、日本語学習者による作文資料のコーパスにおいて、実際の言語運用を調査した。調査結果の分析を、以下の論文として公表した。

○長谷川哲子(2019)「日本語学習者コーパスにおける接続詞の誤用―「そして」の使用に関する問題」『日語偏誤と日語教学研究』4. 81-106. 日本語誤用と日本語教育学会。(査読有)

当該論文では、中国語母語話者の日本語学習者が作成した作文のコーパスを使用し、日本語の接続詞「そして」の誤用の一種として過剰使用を考察対象とした。上記コーパスにおいて「そして」が過剰使用と判定されている文について、「そして」の使われ方を分析し、従来、「そして」の多用として一括されてきた誤用例のタイプ分けを試みた。その上で、以下を結論とした。

まず、接続詞ソシテは、書き手側にとっては初級で提示され平易で使いやすいと思える接続詞である一方、読み手側にとってはもっぱら接続を示し、必要度が低い一方で可換性の高い接続詞である。〈2〉用法が広く機能がとらえがたいとされる接続詞ソシテは、作成する文章のジャンルや長さに合わせて、中級以降でもスパイラルに段階的に指導していく必要がある。

また、接続詞全般の指導に向けた提言として、接続詞自体が日本語教育において文法指導項目として重点的に取り上げられることが少ないことも相俟って、学習者にとっては初級レベルの習得内容のまま接続詞の習熟が取り残されている可能性がある。これは初級で扱われる接続詞の陥穽であり、今後の接続詞に関する習得や指導の研究にとっての課題である。

この論考を通じて、接続詞のような特定の言語形式における過剰使用や使用回避(非用)の背景にあるビリーフはどのようなものか、という発展的な課題を得た。また、プロダクトにおける誤用に対して、教員や評価者からの訂正を受けるだけでなく、学習者自身が自律的にライティングに取り組み、効果的なプロダクト産出に有用、参照可能なサポートツールの開発という新たな課題に取り組むこととした。

④ L2 ライティング研究における今後の課題の設定

言語4技能のうち、ライティング研究については、日本語教育分野では専門的かつまとまっ

た論考や書籍が比較的少なく、第二言語としての日本語ライティング研究もいまだ発展途上の分野である。そのため、今後も、留学生のライティング能力向上に資する研究として、学習者要因や個人差要因の分野の研究を続けていきたい。これまでのピリーフという側面に加えて、学習者による自律的な学びの促進に資する基礎的研究を今後行う予定である。具体的には、2020年度より科研課題「第二言語ライティングにおけるgood writer養成に向けたコーパス開発」に着手する。

【謝辞：2019年度特別研究期間の取得にあたり、本研究課題を採択してくださり、どうもありがとうございました。また、経済学部のみなさま、日本語教育センターのみなさまにもあらためて感謝申し上げます。貴重な時間をいただき、どうもありがとうございました。】

以 上

提出期限：研究期間終了後2ヶ月以内

※個人特別研究費：研究費支給年度終了後2ヶ月以内 博士研究員：期間終了まで

提出先：研究推進社会連携機構（NUC）

※特別研究期間、自由研究期間の報告は所属長、博士研究員は研究科委員長を経て提出してください。

◆研究成果概要は、大学ホームページにて公開します。研究遂行上大学ホームページでの公開に支障がある場合は研究推進社会連携機構までご連絡ください。